

えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	<b>会 報 第 4 2 号</b>	2005年1月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：西原 一誠
---------------------------	--------------------	--

## 1. 年頭のあいさつ

会長 今井和男

新年、明けまして、おめでとうございます。

会員の皆様には、ご家族お揃いで、輝かしい希望に満ちた新年を迎えるのことに、心からお慶び申し上げます。昨年は、会の活動に対して、積極的にご協力を頂き心から、厚くお礼を申し上げます。

昨年の取り組み、活動を振り返って見ますと、

「里山自然観察隊」の会員の増加による充実した活動

「里山自然観察隊」「小学校児童」の田植、稲刈り、はぜ掛け、餅つき、ソバの植付け、竹炭造り及び蓮掘り等の体験学習の活動

見学観察者への対応については、毎年増加しているなかで会員の積極的な対応も、円滑に実施出来ました。大変に好評でありました。深く敬意を表します。

本年は過去の活動、取り組みを反省しつつ、

風倒木を活用した観察道の補修

絶滅危惧植物の維持管理

見学観察者への対応の充実

を中心に里山ビオトープの創造に努めて参りますので、会員のご協力をお願いいたします。

最後に、「里山ビオトープ二俣瀬」の益々のアピールと会員ご家族の御健勝と御繁栄を祈念いたしまして、年頭のあいさつといたします。

## 2. 活動報告（事務局 記）

12月26日（日）臨時参集をメールで呼びかけましたが、蓮田の絶滅危惧種アサザの移植を蓮田掘り起こしに伴い行ないました。移植先は下流の池の縁に行ないました。又草堆肥を蓮田や水田に散布し地力の向上を図りました。参加者が12名と多かったため、椎茸を採取し参加者へ配布と竹炭の入札競売をしました。参加された方ご苦労様でした。

1月15日（土）初集会でした。今年度の活動計画をたてる為、皆で協議しました。新規活動案は、春の七草栽培 合鴨農法による稲作等 活発な意見が出ました。また湿地帯の散策橋の補修要領について、寺森会員より方法の説明がありました。

## 3. 今後の予定（事務局 記）

見学者

現在のところ予定者は有りません

行事

2月6日（第一日曜日）の活動 湿地帯散策橋の補修。椎茸ホダ木製作

2月19日（第三土曜日）の活動 湿地帯散策橋の補修。

#### 4. ピオトープ関連（ピオトープ周辺の植物） 美濃和 信孝

##### カシのなかま

山口県は照葉樹林帯に属するので、自然の遷移に任せるとシイやカシなどの常緑広葉樹林になります。今回はピオトープのまわりで見られるカシの仲間を2種ご紹介します。

カシとはカタギのことで、堅と木を合わせて堅という字を作り、カシと読ませています。図に示したように、カシ類は芽が枝先に4～5個付くので、一つの芽しか付かないタブノキなどの他の常緑樹との区別は容易です。

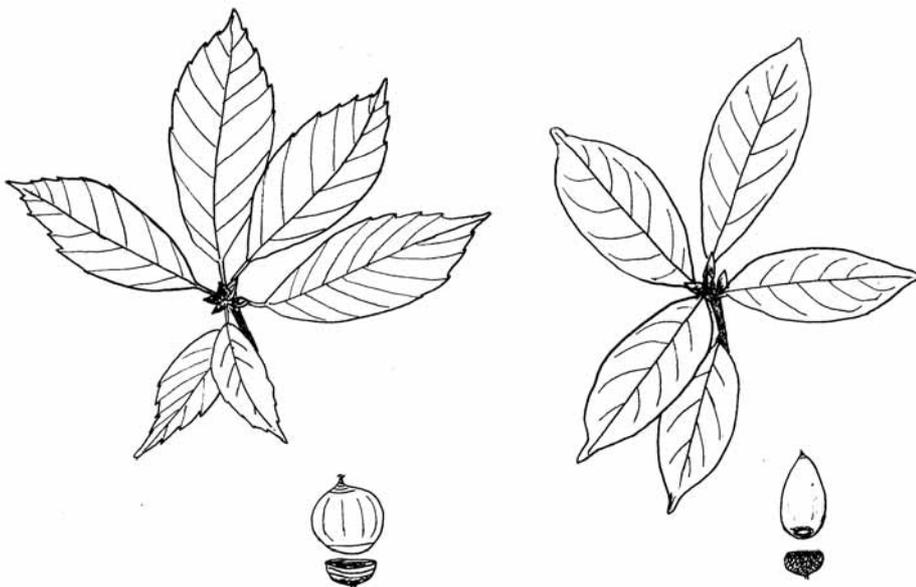
アラカシは、山口県の低地では一番多いカシで、常緑広葉樹全体の中でも一番優先している樹種です。常緑樹の名前を聞かれて、あてずっぽうに「アラカシ」と言えば、6割がたは当たるのではないのでしょうか。葉の上半分にはっきりした鋸歯があり、葉の裏面は口ウ質の物質でおおわれて粉白色になっているのが特徴です。

アラカシは、常緑カシの中では二次林的性格が強く、萌芽性が高いので、多幹になっているものも多く見られます。西日本ではアラカシ、関東地方ではシラカシがアカマツ林やコナラ林を放置した場合にまず現われ、林を構成します。残念ながらアラカシ林は、ヒサカキ、ネズミモチなど少数の照葉樹から構成される種多様性の低い樹林です。本来のシイやイチイガシなどが樹冠を構成する多様性の高い極相林になるまでには数百年の年月が必要です。今はまだその入り口の段階とみるべきでしょう。

シリブカガシは、アラカシに比べれば少ないカシですが、ピオトープのまわりにはぼつぼつと生えています。アラカシがコナラ亜科コナラ属であるのに対し、シリブカガシは、クリ亜科マテバシイ属というかなり遠いグループに属します。マテバシイと同じようにドングリの底が凹んでいるのが「尻深堅」という名前のゆえんです。ドングリの帽子を殻斗（かくと）といいます。シリブカガシは図のように殻斗がウロコ状で、横縞のアラカシとは異なります。葉も、同じ属のマテバシイによく似た厚ぼったい葉で、アラカシとは違って鋸歯がなく、葉脈が鋸歯に入らないことで区別できます。

マテバシイ属の木は、日本にはシリブカガシとマテバシイしか自生していませんが、世界全体ではおよそ数百種があり、東南アジアやインドネシアの熱帯、亜熱帯の山地を中心に分布しています。したがって、シリブカガシはマテバシイ属の中では北限種といってよいでしょう。

ブナ科の樹木の中では、この種類だけは、秋9月頃に開花し、翌年の秋にドングリが実るという変則的なライフスタイルを持っています。どういうわけか、ピオトープ周辺にはシリブカガシの大木がなく、私はシリブカガシの花やドングリを見たという記憶がありません。このドングリにはほとんどアクがないというので、いつかドングリクッキーでも作って食べてみたいものだと思っています。



アラカシ（ブナ科）

シリブカガシ（ブナ科）

## 5. ピオトープ関連 (会員の声)

今回は2名の方より原稿を頂きました。

### 池づくりと総合学習 (原 隆)

ホタル、サワガニ、ヤゴ、メダカなどが住む溜池や田んぼを囲うように小川が流れ、山が迫り来る田園風景は誰の心にもフッと温もりをもたらしてくれるものがある。このような光景を里山と呼んでいます。いま私たちの周辺ではこれらの身近な自然環境が少なくなってきました。減反政策や農家の高齢化で田んぼや畑が遊休地になったり、宅地化されたりして、里山が生き物にとって住みにくい環境となってきました。この里山を取り戻し、保護していくことが自然を守ることに繋がり、ひいては私たち大人にも、子供にもほのぼのとしたゆとりを取り戻せる空間を与えてくれるのではないのでしょうか。二俣瀬の休耕田を見た時に、まさに長年夢を見てた里山としての景観づくり、メダカやホタルやトンボが水面で遊び、網を持つ子供達の姿が見られるような池づくりができればいいと思いました。地主さんのご好意と、行政の関係者の方々や自然を愛する仲間達に助けられ、この二俣瀬で地元のボランティアや学校の先生方とともに、棚田を利用して池づくりを始めて4年目を迎えました。楽しいパンフレットも作りました。そして、事業として表彰も受けました。棚田を利用としてのピオトープとしては、山口県でも第一号ではないかと思えます。山々に囲まれた棚田の横をせせらぎが静かに流れ落ちた谷あいにあります。ようやく出来上がりましたが、これから先皆で力を合わせて維持管理やって行こうと思っています。

今も、課外授業として一般の親子達の為の観察会を開いています。普段と違った教室では見られない子供の表情が見られます。男の子も女の子も長靴をはき網を持って池の中、川の中、湿地の中、思い思いにあっちこっちに散って行く、のびのびした子供の姿は実に楽しいものです。そこで、彼らは何を見つ何と触れ合ったのでしょうか？メダカ、イモリ、ヤゴは図鑑では知っているけど生きてる物は見たこと無いし触ったこともない。そこに、喜びと驚きの声があがり体感するのだと思います。彼らは、観察会が終わって帰って、各自思い思いに心に刻む事とおもいます。自然のなかの棚田の休耕田を利用してつくった池で体験学習して知ることにより、自然生態系の仕組みを五感で学ぶ事ができます。こうした良き仲間と時間、空間の三間を共有化することで、積極的で感受性豊かな人間形成へと向かうことを期待しています。青空の下、親子で里山の水辺に出かけてみてはいかがでしょうか。ゲームでは、体験できないワクワクする新しい発見に出会えるでしょう。我々も自然とともに生きています。川をきれいにし、ホタルやトンボが飛び交う水辺を作っていく運動の輪がますます大きくなることを水辺の生き物たちとともに期待しています。

### とうとう周って来てしまった (若林 正治)

皆様、新年明けましておめでとうございます。

新年最初の、「会員の声」私で、申し訳ございません。

ピオトープも今年で5年目ですね。ピオトープを始めた時、小学1年生だった息子は、今年で、いよいよ6年生になります。時間だけが過ぎた様に思えます。

ここ、ピオトープが出来た時は、毎週のように遊びに出掛け、メダカやトンボを追い回して遊んでいました。最近では子供の興味も変わって来て、なかなかピオトープ探検も一緒に出来なくなってしまいました。・・・

(実の所は、メダカやトンボを追い回す私に付き合いきれなくなったのかも知れませんが?)

ピオトープが、始まった頃には、沢山の水生昆虫と、出会えました。

でも、最近思うのですが、減ってきている様に、思いませんか？

ゲンゴロウ、ミズスマシ、マツモムシ、・・・

ミズカマキリは全然見なくなってしまいました。

環境が合わなかったのか、ここのピオトープに相応しい数に落ち着いたのか？

・・・子供達のお目当ての一つ、水生昆虫が、最近、元気無いように思います。

まだまだ、誕生したばかりのピオトープ、どの様に変貌するのか分かりませんが、子供と虫達が、いつまでも飛び廻ってくれると、良いですね。

追伸、会報ともどもホームページも宜しくお願いします。

次回は 益田 真一 会員にリレーします。宜しく

## 6. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)

今回は記載ありません

## 7. 会よりの連絡事項

(1)

(2)

## 8. 編集後記

ある会員に会報の誤字が多かったり、文法の使い方不適合等々、指摘がありました。まだ今までの会報について確認していませんが期限が過ぎたりした時はよく確認せず印刷などしたことがありました。

会報として「つくる会」以外に提出することもあるためきちとした校正をして発行すべきであると思います。特に文字は多いくらいあると思いますが読者としたとき読む気が起きる構成になっているかなどと考えさせられます。43回にわたって編集委員を続けているのでマンネリ化する事もあると思われるので編集委員の交代し、ここら辺りで新風を巻き起こしては如何でしょうか？ いずれにせよ総会時の協議項目であると考えます。

(原田 満洲夫 記)